羽陽学園短期大学紀要　第10巻　第４号（通巻38号）2018年２月
Bull. of Uyo Gakuen College, Vol.10, No.4, February 2018

「恥ずかしさの感じ方」についての調査研究(1)

－短期大学生の28年間を隔てた結果の比較－

研　　攻　一　名誉教授

（2017年10月５日受理）

〔　要　　約　〕

日本人の国民性とも考えられる「恥ずかしさの感じ方」について、28年間を隔てて11項目からなる同一の質問を短大生に実施して、その変化について検討した。次のような結果が得られた。

(1) 11項目それぞれの質問に対しては、この年月を経ても変化はなかった。

(2) ４つのカテゴリーに分けて、目に見え易い順序に従って同じ出現率が両年度に現れるかを見たが、必ずしもそうした結果は得られなかった。

(3) 年月を経た結果、４つのカテゴリーで目に見え易いものへの選択率が増加し、目に見え難い知識や人生の生き方などへの選択率は減少した。

(4) カテゴリーレベルでは、「恥ずかしさの感じ方」について変化の兆候が認められた。

１．問題

「恥ずかしさを感じる」というのは、日本人の民族性や国民性とも関連する特徴の一つと考えられる。こうした特徴は日本人そのものの中では意識されないで、歴史的には日本にきた外国人たちの目に留まることで意識化されてきた。例えば、ポルトガル生まれの宣教師のルイス・フロイス（1532～1597）は、ヨーロッパと比較した日本人論を記している[1)]。その中で子供について「われわれの間では普通鞭で打って息子を懲罰する。日本ではそういうことは滅多に行われない。ただ（言葉？）によって譴責するだけである。」「われわれの子供は大抵公開の演劇や演技の中でははにかむ。日本の子供は恥ずかしがらず、のびのびしていて、愛嬌がある。そして演ずるところは実に堂々としている。」というように子供たちの在りようについての比較を述べている。この違いは当時のヨーロッパと日本の社会状況の違いに起因するものだろう。

日本の子供への大人たちの接し方は、どの時代でも同じだったかというとそうではない。柴田[2)]によれば、歴史的に養老律令では７歳までは人間として扱わないという規定により、子どもは人間的な存在として扱われなかった。15世紀以降、社会状況が変化して有力農民が固有の家名や家産・家業を維持するために、父兄直系で代々継承する必要が契機となって、子供の存在はそれまでの子供観とは異なる意味を持つようになり、「子宝」という意識が芽生えてくるようになったという。そうした時期にフロイスは日本の子供を見ていたことになる。このように、ある思想や考え方はその時代の社会構造や状況の在り方の違いを抜きにしては考えられない。

第二次世界大戦後の日本人論の問題として、「恥の文化」が大きなテーマとして取り上げられた時期があった。この特徴も外国人だからこそ見えるものの一つであろう。この「恥の文化」については、「菊と刀」[3)]を著したルース・ベネディクトによる研究（第二次大戦の対日政策の裏付けとするため）で、欧米の「罪の文化」と比較しながら、その特徴を示している。その概略を示すと、[4)]「日本人は『恥を基調とする文化』に属しており、『恥が主要な強制力となっているところにおいては、たとえ相手が懺悔聴聞僧であっても、あやまちを告白しても一向気が楽にならない。それどころか逆に、悪い行いが“世人の前に露見”しない限り、思いわずらう必要はないのであって、告白はかえって自ら苦労を求めることになると考えられている。したがって、恥の文化には、人間に対してよりはもとより、神に対してさえ告白するという習慣はない。～中略～　『日本人の生活において恥が最高の地位を占めているということは、恥を深刻に感じる部族または国民が全てそうであるように、各人が自己の行動に対する世評に気を配ること』であり、『彼はただ他人がどういう判断を下すか、その他人の判断を基準にして自己の方針を定める』と日本人への深く鋭い考察がなされている。『恥の文化』と『罪の文化』とを対照的に記述している所は、道徳的規範と民族性や国民性

との関連に関して多くを学ぶことが可能である。」と述べられている。

日本のこうした「恥の文化」の形成については、ベネディクトは戦前の日本社会はヒエラルキー構造になっており、そのヒエラルキーを維持するためには、自分が属する階層で行う行為を逸脱しないことが必要となる。自分の行為が逸脱しているかどうかは、他の階層の人たちの判断によって、自分の行為を修正し評価することで調整するというのである。その当時の家庭では父親が上座に座り、長男など男子優先で生活や行事が行われていた。入浴の順番も男性からというのが一般的であった。こうした発想は八紘一宇の思想や東南アジアを含む大東亜共栄圏の思想にも通じるものである。

第二次世界大戦までの日本の社会構造によって、人の目を気にし恥を感じる行動特性である「恥の文化」が学習されてきたとベネディクトは考えたのである。

戦後の憲法改定によって社会状況は大きく変化し、男女同権や社会平等化などが当たり前になってきた現在においても、こうした「恥の文化」による行動特性は維持されているのだろうか。

残念ながら筆者は戦前や戦後直後の「恥の文化」に関する実証的データは持ち併せていない。また戦後社会が社会制度的には同一でありながら、社会状況は大きく変化しているだろうから、「恥ずかしさを感じる」程度も変化している可能性がある。

個人的な経験から言えば、30年ほど前にはオリンピックに参加する日本選手の多くは、国内記録をオリンピックの場では出せなかった者が多かったように思う。その原因は、観客の視線や国民の期待など他者の評価の重圧に押しつぶされる心理特性が存在していたからだと思われる。このことも「恥の文化」による側面と考えられる。最近では色々のスポーツでオリンピックの場で新記録や好記録を出して、外国の選手にひけをとらない選手も多く見かけるようになってきた。昔ながらの他者の評価を気にするというよりは、それを頑張るための動機づけにしている様子さえ見られるようになった。こうした社会の雰囲気の変化が垣間見えることから、ベネディクトのいう「恥の文化」が今の時代でも相変わらず維持されているかどうか知りたいところである。

本研究の目的は、人の目を気にする「恥の文化」（「恥ずかしいと感じる」）が、戦後の社会制度は大きく変わらないままでありながら、社会状況が変化してきたと想定できる28年間の比較をすることによって、日本人の心理的特性として「恥の文化」（「恥ずかしいと感じる」）が保持されているのかを調査することである。

「恥ずかしいと感じる」程度や度合いは、見ている相手と自分との関係や、場面の違いによっても影響される筈であるが、本研究ではこうした条件を特に考慮することなく、一般的な事態や状況における「恥ずかしさを感じる」かどうかについて考えていく。

ところで恥ずかしさの感じ易さは、人の目に留まりやすいかどうかに左右されて影響される可能性がある。他人の目に留まり易いときと留まり難いとき、「恥ずかしさを感じる」程度は、目に留まり易いと思われる方がより恥ずかしく、留まり難いと思われる方はそれほどでないと推測できる。このように目に留まり易さの程度の違いによって、「恥ずかしさを感じる」程度が異なることが予想できる。

そう考えると「恥の文化」にはその恥を感じる人の心理的特性として、ある意味の階層関係が想定できる。つまり表層部分として、見た目の服装やスタイルに関するもので恥ずかしさを敏感に感じるようなものと、中心層では生き方など人の目には直接見ることが難しく恥と感じ難い層があると想定できる。

ところで、目に留まり易いか留まり難いかは、それを判断する存在（観察者）とその反応を通して、被験者が感じる「恥ずかしさ」と「その程度」が変化する可能性がある。つまり相互作用とその循環に応じて、「恥ずかしさを感じる」内容も異なる筈である。本研究の被験者は20歳前後であり、自分より年の離れた中高年などとの関わりは生活の中で少ないと思われることから、同年代に対して「恥ずかしさを感じる」可能性が高いと判断して、その反応を検討していると想定している。

他にもその恥を感じる基準は、恥を感じる人の心理的基準にも依存する筈である。これまでの恥についての学習や恥ずかしさに関する価値観の違いに依存する側面もあるからである。

本研究ではこうした恥を感じる側の心理的基準でなく、目に留まり易さを基準として、調査項目を４つの項目群に分類する。その一つ目は、生活での服装、髪型やスタイルなどの身体的な特徴に関するもの、二つ目は漢字の読みや生活の中での知識に関するもの、三つ目は学校教育で身に着けてきた学力に関するもの、四つ目は自分の出身校や生き方に関するものである。その項目群ごとの「恥ずかしさの感じ方」の程度を測定して、見た目の程度の違いによるカテゴリー化の想定が妥当かどうかについても検討する。

Ⅱ．方法

１．対象（被験）者　Ｉ短期大学１年生82名
　　Ｕ短期大学１年生82名　計164名

2．調査期日　平成元年（1989）９月13日
　　平成29年（2017）７月14日

3．調査手続き

(1) 調査　質問紙を配布して、該当する項目に○をつけさせる。特にそう思う項目には◎を付けるように指示する。

(2) 質問項目に女子学生にだけ該当する項目があるので、両短期大学から男子学生を間引いた結果、ほぼ似た数字になったので対象者数を同数にした。因みに調査時間は10分程度であった。全員の調査が終了した時点で回収した。

(3) 調査内容

●あなたが下の項目で「恥ずかしい」と感じるのは、どの項目でしょう？　○をつけてください。いくつ選択しても構いません。特に恥ずかしいと感じるものには◎（二重丸）をつけてください。

（　　）あなたの着ている服や髪型がダサいと言われたときⒶ
（　　）あなたは「1492年にコロンブスがアメリカ大陸を発見したのではない」と言われて、その証拠を見せられたときⒷ
（　　）あなたの出身高校は、三流校なのねと言われたときⒸ
（　　）秋の七草がことばで言えなかったときⒹ
（　　）春の七草をことばで知っていたが、具体的に示せなかったときⒺ
（　　）あなたの生き方は、センスが悪いねと言われたときⒻ
（　　）あなたはスタイルが悪いのねと言われたときⒼ
（　　）「検見」を「けんけん」と読み、「産湯」を「さんゆ」と読んでしまったときⒽ
（　　）高校２年生程度の英語の教科書がスラスラ訳せなかったときⒾ
（　　）高校３年生程度の数学の問題ができなかったときⒿ
（　　）釘でひっかけたストッキングをそのままはいているときⓀ

（この結果はまとめて統計処理します。個人の結果をそのまま使うことはありません。安心して回答してください。m(__)m）

(4) 調査項目の群構成

この11項目を４群に構成する。Ａ群からＤ群に従って、目立ち易さが減少していく。逆に具体的概念から抽象概念へと抽象度が高まっていく。

・Ａ群　項目番号Ⓐ、Ⓖ、Ⓚ（３項目）：髪型、服装、スタイルなど
・Ｂ群　項目番号Ⓑ、Ⓓ、Ⓔ、Ⓗ（４項目）：知識の有無、漢字の読み
・Ｃ群　項目番号Ⓘ、Ⓙ（２項目）：学力の程度
・Ｄ群　項目番号Ⓒ、Ⓕ（２項目）：生き方や出身校

(5) 仮説

28年間の時間経過にも関わらず、民族的、国民的な価値としての「恥の文化」が継続していると予想できるとすると、基本的な傾向として

1)．11項目の選択傾向は、1989年度と2017年度で違いはないだろう。

表面的に見え易い項目から内面的で見えにくい項目までの４項目群を構成し11項目を以下に分類した。それにより、

2)．Ａ群（髪型、スタイル、ストッキング）から、Ｂ群（春と秋の七草、コロンブス、検見産湯の読み）、Ｃ群（高２英語、高３数学）、Ｄ群（生き方、三流校）の順で、選択率は減少していくだろう。

3)．1989年度と2017年度間で、４項目群間の選択率に違いが見られないだろう。

４項目群のうち「特に恥ずかしさを感じる」項目群は、1989年度と2017年度間で「恥ずかしさを感じる」内容の変化が予想されることから、

4)．1989年度と2017年度間で、「特に恥ずかしさを感じる」選択反応率の項目群に違いが生じるだろう。

Ⅲ．結果と考察

1．年度別の各項目の平均選択値の順序結果

1989年度と2017年度の選択率の平均値を高い順から示したものが表１である。厳密には年度によって下の順位項目と同じか低い場合があるが、高い順位の値がある項目を上位とした。（なお平均値の１が100％の選択平均値となる）

表１　11項目の選択平均値の順序結果

項目		N	平均値	標準偏差	有意確率
ストッキング	1989	82	0.91	0.281	
①Ⓚ	2017	82	0.93	0.262	
髪や服	1989	82	0.62	0.488	
②Ⓐ	2017	82	0.67	0.473	
検見産湯	1989	82	0.56	0.499	0.061
③Ⓗ	2017	82	0.41	0.496	

スタイル	1989	82	0.34	0.477	
④Ⓖ	2017	82	0.41	0.496	
高２英語	1989	82	0.26	0.439	
⑤Ⓘ	2017	82	0.28	0.452	
高３数学	1989	82	0.26	0.439	
⑥Ⓙ	2017	82	0.20	0.399	
生き方	1989	82	0.20	0.399	
⑦Ⓕ	2017	82	0.16	0.367	
三流校	1989	82	0.21	0.408	0.051
⑧Ⓒ	2017	82	0.10	0.299	
秋七草	1989	82	0.10	0.299	
⑨Ⓓ	2017	82	0.04	0.189	
春七草	1989	82	0.07	0.262	
⑩Ⓔ	2017	82	0.06	0.241	
コロンブス	1989	82	0.05	0.217	
⑪Ⓑ	2017	82	0.01	0.110	

上位に属するものは、「釘でひっかけたストッキングをそのままはいている」への選択率が①位で、両年度共に90％を超えている。次の「着ている服や髪型がダサいと言われたとき」②位、「スタイルが悪いのね」④位と高い順位を示している。これらの項目は、他人の目に見え易い点で共通している特徴がある。

それに対して、知識に関する「秋の七草」⑨位、「春の七草」⑩位、「コロンブス」⑪位の３項目は、最低選択率となっている。「検見と産湯の読み」③位は、選択率が高くなっており、前三者と較べると異なっている。これは読めるかどうかという点で、常識がないとか、ものを知らないという評価を受けやすく目に見え易いものに準じることが原因かもしれない。それに対して前三者の項目は知らない人も多数おり、その点「恥ずかしさを感じない」ですむ知識領域に入るのではないかと考えられる。

その次には「高校２年の英語」⑤位、「高校３年の数学」⑥位が中位で、同じような選択率となっている。その下に「生き方のセンスが悪い」⑦位、「三流校」⑧位が続いている。

この結果は、「恥ずかしさを感じる」感じ方は一応ではなく、被験者の中にその程度について順序性があること、項目群の違いを考えることができるような「恥の文化」についての心理構造を想定できることを示している。

この11項目で年度間に有意差は認められないものの、有意傾向が示されているものに「検見と産湯の読み」と「三流校」の項目がある。どちらも2017年度の方が低く、2017年度の被験者が「恥ずかしく感じない」傾向を示している。11項目について、大まかには同じ結果傾向があると考えられるが、細部では多少の変化傾向があると言えよう。

２．年度別の各項目群の選択率の平均値

調査項目の11項目を、見た目によるものから内面的だと思われるＡ群からＤ群までの４項目群（カテゴリー）に任意に分けて、その年度別の選択率の結果を示したものが表２である。各群の内訳は、Ａ群（服や髪型、スタイル、ストッキング）、Ｂ群（秋の七草、春の七草、コロンブス、検見と産湯の読み）、Ｃ群（高２の英語、高３の数学）、Ｄ群（生き方、三流校）である。

表２　年度別各群の選択率（％）

年度＼項目群	A	B	C	D
1989	62.6	19.5	25.6	20.1
2017	67.0	13.1	23.8	12.2

Ａ（髪・スタイル・ストッキング）
Ｂ（秋・春・検・コロンブス）　Ｃ（高２・高３）
Ｄ（生き方・三流校）

両年度ともに各群の選択率は似た傾向を示しており、Ａ群ではどちらの年度も60％を超えており年度間に差は見られない。またＣ群も20％以上で同様な選択率となっている。しかしＢ群とＤ群については2017年度の選択率が低くなっており、「恥ずかしさを感じる」程度に変化が見られる。しかし「恥ずかしさを感じる」感じ方は、28年の歳月を経過しても、４項目間に多少のバラツキはあるものの基本的には同様な選択傾向が見て取れる。

３．年度別の各項目群の選択数の平均値と１項目当たりの平均選択数

そこで各項目群の平均値と１項目当たりの平均選択数の結果を示したものが、表３である。

そこで年度別の項目群の結果を見ると、Ａ，Ｃ，Ｄ群間には有意差は認められないものの、Ｂ群では2017年度の選択率が低く、年度間に有意差（５％水準で）が見られた。28年間の時間経過によって、大まかには「恥ずかしさを感じる」様相は、全体的に似ているものの、知識に関するＢ項目群では、「恥ずかしさを感じる」傾向に変化が見られ、恥ずかしさを感じなくなっていることが見て取れる。

１項目当たりの平均選択数を見ると、他人から目につきやすい特徴を持つＡ群では、見た目の様相について「恥ずかしさを感じる」傾向が1989年度よりは2017

表３　年度別の項目群別選択数の平均値と１項目当たりの平均選択数

項目群		N	平均値	標準偏差	有意確率	１項目当たりの平均選択数
A	1989	82	1.88	0.837		0.62
３項目	2017	82	2.01	0.824		0.67
B	1989	82	0.78	0.861	※	0.19
４項目	2017	82	0.52	0.689		0.13
C	1989	82	0.51	0.835		0.25
２項目	2017	82	0.48	0.757		0.24
D	1989	82	0.40	0.626		0.20
２項目	2017	82	0.24	0.534		0.12

※５％有意水準

A（髪・スタイル・ストッキング）
B（秋・春・検・コロンブス）　C（高２・高３）
D（生き方・三流校）

年度の方が強くなっている。C群では年度間にほとんど差は見られない。B群では平均選択数が減少している。この群では知識内容を知っているかを問われており、「恥ずかしさを感じる」にしても、背景にある全体の学力よりは、表面的であり常識的な知識があるかどうかを問われていると考えている可能性があり、A群ほどには「恥ずかしさを感じない」ですむのではないか。また、D群では2017年度で平均選択数が減少傾向が見られる。このようにA群の選択傾向が強くなっているのに対して、B，D群では選択傾向が弱くなっている。C群は変化が見られない。

ところで表１の結果からは、B群の「秋の七草」「春の七草」「コロンブス」の３項目と「検見と産湯の読み」での選択率では大きな差があった。想定したB群では知識領域と一括りにしたが、質的に異なっている可能性がある。B群における両年度の有意差に寄与したのは、「検見と産湯の読み」の可能性が高い。その点でこの項目群（カテゴリー）の内容について不適当であった可能性がある。

C群では高校２年生の英語や３年生の数学についての学力が低いことが知られる不安と、学力の低さに対する他者評価の恐怖心で恥を感じる傾向は、これまでと変わりがないと言える。

D群では自分の生き方や三流校出身であることが、自分の人間性と「恥ずかしさを感じる」関係にストレートに繋がらなくなっている傾向が見られる。

これらの結果から、2017年度の方が見た目の「恥ずかしさを感じる」傾向が強く、知識の有無や出身校や人生の生き方のような内面的なことには「恥ずかしさを感じない」ように変化していることが示されている。

表４　年度別項目群の「特に感じる」の選択率（%）（「特に強く感じる」数/選択数）

年度＼項目群	A	B	C	D
1989	26.6	10.9	9.5	12.1
2017	33.9	4.7	5.1	30.0

A（髪・スタイル・ストッキング）
B（秋・春・検・コロンブス）　C（高２・高３）
D（生き方・三流校）

４．年度別項目群の「特に感じる」の選択率

各項目群の選択肢で「特に強く感じる」選択の反応率を示したものが表４である。

各群の選択率のうち、「特に強く感じる」と反応した結果を示したものが表４である。それによれば、A群、D群に対して2017年度の方が「特に強く感じる」傾向が見られ、B群、C群に対しては1989年度の方が「特に強く感じる」傾向が見られる。しかし、それぞれについて、年度間に有意差は見られない。

これらの傾向から見ると、2017年度の方が1989年度に比べて、見た目のものや生き方や学歴に対しては「恥ずかしく感じる」傾向が強く、英語や数学が低学力であったり知識が欠如していても、恥ずかしいとは感じない心理傾向が見られる。特にD群に対しては、表３の１項目当たりの平均選択数とは異なる結果となっている。「特に恥ずかしく感じる」人と「全く恥ずかしく感じない」人の二極化が生じている可能性を予想させるものとなっている。

Ⅳ．仮説の検討

１．両年度の11項目の選択傾向

調査項目である11項目について、平均選択値の結果からは、どの項目についても有意差は認められない。このことから28年間の時間経過によっても基本的な選択傾向には違いがないといえる。このことから、仮説１）は支持される。

２．A群からD群までの「恥ずかしさを感じる」選択率

A群からD群に従って選択率が減少すると予想したがそうはならなかった。目に留まり易さの程度順では、A，B，C，D群の順だと想定したが、実際には、1989年度ではA，C，D，B群の順で、2017年度ではA，C，B，D群の順となっている。両年度ともにC群での選択率はほぼ同じで差がないことを考えると、A，C群の順序とB，D群を一体として考えると、両年度では同じ選択傾向と考えることもできる。しかしA，B，C，Dの選択の順序とはならなかったことか

ら、仮説２）は支持されない。

３．両年度の４項目群の選択率の違い

両年度間ではＢ群で有意差が認められた。しかも2017年度が選択数の平均値が低くなっている。１項目当たりの平均選択数で28年間の時間経過に伴って、知識領域に関する項目であるＢ群と生き方や出身校についてのD群で選択数の減少傾向が見られ、項目間で選択率の変化が見られた。これらのことから、仮説３）は支持されない。

４．「特に恥ずかしさを感じる」選択率

1989年度のＢ，Ｃ群が2017年度に比べて高い傾向があり、2017年度のＡ，Ｄ群では1989年度より高い傾向が見られた。両群間に「特に恥ずかしさを感じる」傾向に差が見られるが有意差があるほどではない。時間経過に伴ってその傾向がはっきりしてくる可能性がある。これらのことから、仮説４）は支持されない。

Ⅴ．討論

１．「恥ずかしさを感じる」傾向の持続性

28年間を隔てて「恥ずかしさを感じる」傾向に違いがあるかどうかを検討したが、11項目について調査したそれぞれの項目は両年度間に有意差は見られず、「恥ずかしさを感じる」傾向に違いがないことが認められた。文化人類学者であるルース・ベネディクトは、「恥の文化」は日本人の民族性や国民性に付随する文化的な心理特性だと、第二次世界大戦前の研究によって示している。彼女が調査研究した当時の日本人の「恥の文化」の特徴が、ほぼ45年経った1989年度にも同じ概念内容だったかどうかについては証拠がない。（ベネディクトは戦時中で日本に来られなかったので、小説や映画、在米日本人を対象にして「恥の文化」についての仮説を立てた。）1944年の「恥の文化」が基本的に継続していたとしたら、今回の28年間の隔たりを経ても、基本的に変化がない結果は、ある意味で納得できるものである。日本人の国民性として「恥の文化」は心理特性として根底に存在しているということになる。

日本の戦前の社会制度や社会状況の中でベネディクトの言に従えば、ヒエラルキー構造に基づく人の目を気にし自分の行動を調整する行動様式の育成が社会全体で行われて、「恥の文化」が形成されてきたと考えてみると、戦後の憲法改正に基づく民主的国家の教育による、個人の尊重や男女同権などの思想を学んで他人の目を気にしなくなることから、「恥の文化」に基づく行動傾向は減少しても良い筈である。

この28年間には社会経済的変化や欧米化による個人主義的な価値観が更に強まって、他人の目を気にしない風潮が強まり、「恥の文化」が払拭または変質しても良いと予想されるにも拘らず、その根底には「恥の文化」が存在している。つまり日本人の表層的な個人主義的な価値観とは別に、その奥底には「恥の文化」が存在するという価値観の二層構造が見られる。

こうした「恥の文化」が変わらないのは、ベネディクトによる社会的ヒエラルキーに基づく学習結果というよりは、彼女によって定式化されたものの更に奥にある基盤となるものが、日本人の心理特性の底流として学ばれ流れているのではないかという疑問がある。その心理特性とは他者と自分を区別しようとする、よく言われる日本の地域（ムラ）社会に見られるウチとソトの区別の意識である。中根[5)6)]はタテ社会の人間関係について、「『ウチ』『ヨソ』の意識が強く、この感覚が先鋭化してくると、まるで『ウチ』のもの以外は人間でなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが同じ社会に見られるようになる。」と述べている。自分と同じ社会に属するか属さないかという視点で他者を判断し区別（差別）する意識が、古くから日本社会にはあって、人の目を気にする心理や行動がそこで育てられてきたのではないかということである。そう考えると「恥を感じるかどうか」の前に、自分の仲間かそうでないかを区別する心理特性があり、その結果、身内や仲間なら「恥ずかしさを感じないで済む」が、よそ者なら「恥ずかしさを感じる」というように心理的構造が二層になってきた可能性が考えられる。このように、ウチとソトを分ける心理特性は、今でも日本社会の機能を左右するほどの要因になっており、ベネディクトのヒエラルキーの定式化は、そうした二層の心理特性の表面的な「恥の文化」のみに着目した結果ではなかろうか。（アメリカという国にいて現地調査しなかった研究者の定式化の限界かも知れない。）そうすると、心理構造として「他人の目を気にしない表層」、「恥の文化の中層」、「ウチとソトを分ける底層」の三層の心理構造になっている可能性があるというわけである。

このような日本社会の底流にある心理特性が、連綿と学ばれ受け継がれているとしたら、「恥の文化」が28年間を経ても変わらないままであるのは当然のことかもしれない。

２．４項目群の設定

日本人に「恥の文化」の心理特性があるとしても、それがどの調査項目についても同じレベルの同じ反応を示すとは限らない。項目内容の違いによって「恥ずかしさを感じる」程度も異なると考えることは当然だろう。

本研究では「恥ずかしさを感じる」程度の違いを規定する条件として、20歳前後の短大生たちにとって目につき易いと考えられる基準を定めて４項目群を便宜的に設定した。身体的特徴に関するＡ群（服や髪型、スタイル、ストッキング）、知識に関するＢ群（秋の七草、春の七草、コロンブス、検見と産湯の読み）、学力に関するＣ群（高２の英語、高３の数学）、生き方に関するＤ群（生き方、三流校）である。短大生にとってＡ群からＤ群に従って目につき易さの順序が少なくなっていくと想定して、それに対応して「恥ずかしさを感じる」程度もこの順序で低くなっていくのではないかと予想した。逆に言えば、Ｄ群に近づくに従って見た目よりは内面的な在り方に「恥ずかしいと感じる」ことを意味している。それを選択率によって判定した。

その結果、Ａ群の選択率は両年度で予想通りの高率であり、次にＣ群の選択率が両年度でＢ群より高くなった。この結果は想定した順序とは異なる結果であった。「恥ずかしさを感じる」程度について、単なる見た目ではない条件が関与していることを示している。当然といえば当然であるが、「恥ずかしいと感じる」程度や傾向は、被験者の学習経験やその内容によっても異なることは予想されることから、こうした条件の違いによってＢ群とＣ群の逆転が起こったと考えられる。事項的な「知識領域」を知らない事への恥ずかしさと、短大生でありながら高２の英語が訳せないとか、高３の数学ができないという事実に伴う恥ずかしさの違いは、後者の方が被験者の内面的な劣等感や人間性への打撃を与える可能性が大きいと予想できる。後者は自己存在に対する恥ずかしさを予想させるが、両年度で同じような選択率の順序になっていることから、時代を超えて被験者の内面的な共通条件が作用して、Ｃ群の選択率が高くなったのではないかと考えられる。

一般的にどこでも同じ結果が生じるかには、少し用心する必要がある。というのは、対象者が同じ短大で同じ学年であることから、学んでいる知識内容はほぼ同じであり、自分が知らない知識内容があっても、それを評価する相手も同じようなものという判断が起こり得る可能性があるからである。彼女らの違いは出身校だったり、英語や数学ができるかどうかという学力全体の比較がされれば、相手に対する心理的な優位性は変化する可能性があるだろう。今後はこうした短大生の心理的傾向を形作っている要因について検討する必要がある。

４項目群の選択率の順序とは異なり、４項目群で両年度でほぼ同様の選択率を示しているから、この４項目群の設定は全くの出鱈目ではない可能性を示している。但し、Ｂ群（秋の七草、春の七草、コロンブス、検見と産湯の読み）の「秋の七草、春の七草、コロンブス」と「検見と産湯の読み」の選択率が大きく隔たっていることから、これらは異なる「恥ずかしさを感じる」カテゴリーに入るのではないかと考えられる。その点で、Ｂ群は異質なものが介在した選択率ということになる。これについても今後検討していく必要がある。

３．社会状況の変化と「恥の文化」との関連

本研究の調査項目11項目のそれぞれについては、28年間を隔てた両年度で選択率（平均値）に差は見られなかった。そのことから「恥の文化」は基本的に維持されていると考えることができる。

しかし項目群に目を向ければ、知識領域や自分の学力、そして生き方などの内面的な自己に対する他者からの評価について、「恥ずかしさを感じる」ことが少なくなっている傾向も見られた。

問題で示したように、子供観の変化は1000年ほどの時間経過を経ている。しかし、社会状況が子供の在り方を変化させる必要性があった時には、そうした長年月の価値観を変化させる可能性もまたあったのである。似たものに明治維新の富国強兵を目指した日本で、国民の１～２割しか存在しなかった武士の価値観を社会的規範へと変化させて、軍隊や家父長制度を整えようとした明治政府の政策がある。その思想的な背景に、それまでの士農工商や武士間の上下関係をモデルとした社会的なヒエラルキー思想があり、その結果「恥の文化」がより強く意識されるようになったと考えられる。そう考えると、「恥の文化」を認めない制度、そして根底にある「ウチとソトを分ける」意識を変えるような社会構造や制度を作らない限り、基本的に「恥の文化」はなくならないかもしれない。

この問題は社会制度や社会構造が先か、それとも社会状況が先かという問題を含んでいる。子供観の変化では、恐らく社会状況の変化があって、それを認めるような社会制度が作られるようになったのだろうし、明治維新の社会制度も、一見すると国際的に国家として認めてもらえる制度を作ったと考えられるが、背景には日本の社会状況を反映したような制度になっている。社会状況が最初にあって、それに基づく社会制度が作られていくプロセスを採ることが一般的なのかもしれない。

そう考えると項目群にまだ見られる「恥ずかしさを感じる」傾向の変化は、28年間というスパンでは短いと考えた方が良いかも知れない。最初は揺らぎに過ぎ

ないと考えられる変化が、長い時間と個人主義的な風潮がさらに高まって、A群にさえも「恥ずかしさを感じる」傾向がなくなったとき、同時に「ウチとソトの意識」もなくなっていくのだろう。

しかし、今回の被験者である短大生では、A群で「恥ずかしさを感じる」傾向が強くなっている。筆者の予想する流れとは逆行する傾向を示しているのである。この傾向を助長したのには、ここ15年にわたる日本の教育の「ゆとり教育」の影響が強いのではないかと思えてならない。ゆとり教育を受けてきた学生を教えた個人的な経験によれば、自我意識は強いが学力的には低く、他人とは喧嘩しないように人間関係に深入りしない行動特性が見られた。その結果として、悪く思われないように他人の目を気にする傾向が強くなって、自我意識の防衛のために、学力の問題を大したことではないと考え自分を守る傾向が、以前の学生に較べて強くなってきたように感じている。このようにゆとり教育が「恥ずかしさを感じる」傾向の揺らぎに影響を与えてきた可能性を感じている。このことからA群に対する「恥ずかしさを感じる」傾向が強くなっているのは、一過性のものかも知れない。

Ⅵ. 終わりに

「恥ずかしさを感じる」かどうかを28年間の隔たりを経て11項目について調査した。ルース・ベネディクトの「菊と刀」による日本人論では、日本人は「恥の文化」に基づいて行動すると考えている。それに較べて欧米人は「罪の文化」によって行動し、他人の目は気にならないと述べている。考えてみれば、欧米の「罪の文化」は人間ではない「神の目（？）」を気にしているに過ぎないのであって、具体的な人間なのか、想定された神なのかの違いに過ぎないと考えることもできる。こうした議論は別に譲るにしても、本研究での結果は「恥の文化」に基づく基本的な行動傾向が、今どきの短大生にも確実に受け継がれている様子が見られた。

こうした「恥の文化」の概念内容が全く変化しないままかと言うと、その変化の兆候が多少見られたことも事実である。知識領域や学力に「恥ずかしさを感じない」傾向が強くなっているのである。

これからの時間経過のなかで、この変化が鮮明になってくるのか、これまでと同じように基本的に「恥の文化」が継続されるのかは興味深い問題である。この時間経過の変化とは別に、「恥ずかしさを感じる」ときの場面や、相対する人間の違いによって「恥ずかしさを感じる」行動が、どのように変化するかなども今後検討していく必要があると考えている。

引用文献

1）築島謙三「『日本人論』の中の日本人（上）ザビエルから幕末まで」講談社学術文庫　2000.9
2）柴田純「日本幼児史　子どもへのまなざし」吉川弘文館　2012.12
3）ルース・ベネディクト「菊と刀　日本文化の型」長谷川松治　訳　現代教養文庫　1967.3
4）「世界の日本人観　日本学総解説」筑紫哲也　編　自由国民社　1979.1
5）中根千枝「タテ社会の人間関係　単一社会の理論」 講談社現代新書　1967.2
6）中根千枝「適応の条件　日本的連続の思考」講談社現代新書　1972.11

SUMMARY

Kohichi TOGI:

The Investigation of "the Feeling of Shame" of Japanese (1)
– Comparison of Results between the Distance of 28years of Junior College Student –

The purpose of this study is to examine the difference and change of "the feeling of shame" of junior college students between two different year, that is 1989 and 2017. The written inquiry was composed of 11items.

The following results were acquired.

(1) The results of 11items were not difference in spite of distance of 28years.
(2) The11items were divided into 4categories, the result of response rate was not acquired expected ordering which would be able to see on the order of surface.
(3) In the 4 categories, the response rate which could be seen on surface increased, but the response rate like knowledge and belief which could not be seen decreased
(4) In category level, the symptom of change of "the feeling of shame" was confirmed.

(Emeritus Professor of Uyo Gakuen College)